S. Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――キリスト思想史、古代から中世・宗教改革

Ｂ．目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

Ｃ．内容

本年度後期のテーマは「キリスト教思想、古代から中世・宗教改革」であり、講義は、初期キリスト教から古代教会の成立と展開、ゲルマン民族移動から中世キリスト教世界と宗教改革までの範囲から、研究テーマを設定しつつ進められる。

Ｄ．確認事項

受講者には、一回の研究発表が求められる（キリスト教学学部生には原則的に発表が求められる。ほかの者はレポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（木２、金３）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化	10/1
１．キリスト教の成立と初期キリスト教	10/8
２．キリスト教教父――使徒教父、弁証家	10/15
３．キリスト教の国教化	10/22
	（休講：10/29, 11/5）
４．三位一体論の形成過程とその意義	11/12
５．研究発表１（卒論）	11/19
６．研究発表２	11/26
７．キリスト教教父３――アウグスティヌス	12/3
８．中世キリスト教世界のダイナミズム	12/10
９．キリストと文化――スコラ的文化総合	12/17
10. 研究発表３（「キリスト教学研究室」にて）	12/24
11. 自然神学と歴史神学	1/7
12. イスラームと１２世紀ルネサンス	1/14
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」）	1/21

＜宗教と文化＞

０．なぜ思想史なのか、キリスト教思想史の意義

１．宗教現象を見る二つの視点

1)外から、客観的データの分析に基づいて　→　現代宗教学

宗教現象にアプローチするにはまず第一に考えられるべき方法論的態度ではあるが、対象を「深く」理解するには限界がある。

2)内から、内から発信され表現されたものを手掛かりに内面へと迫る。

個人であろうと集団であろうと、その内面にまで迫る仕方で理解するには、対象自身が意識的あるいは無意識的に外部へ発信してくる自己表現に注目。

２．思想とは何か？　なぜ思想なのか！

生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）としての思想。

思想は暗記科目ではない。

３．思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。

→　キリスト教思想は聖書から始まる。

４．生きられた思想と語られた思想

両者の循環構造の成立する場としての「われ／われわれ」

→　共同体／正典／信仰告白（正統と異端）

５．思想の歴史性　→　思想史的アプローチの必要性

伝統（テキストの影響史・受容史、地平融合）→理解

６．水垣渉「聖書的伝統としてのキリスト教―「キリスト教とは何か」の問いをめぐって―」（2014 年 9 月 9 日、関西学院大学、日本基督教学会・公開講演）

７．ティリッヒの文化の神学

構想：『文化の神学の理念について』（1919 年）

基礎論（学の体系論・科学論）：『諸学の体系』（1923 年）

宗教学の体系（宗教哲学／宗教史・宗教類型論／規範的宗教学＝教義学）：

『ベルリン講義』（1919/20 年）、『宗教哲学』（1925 年）、『マールブルグ講義』（1925 年）

cf.　波多野宗教哲学（宗教本質論、宗教類型論、哲学的人間学）

・宗教と文化→意味の形而上学（意味論）

意味世界（意味システム）としての文化と、意味システムの根拠付けとしての宗教

意味根拠の歴史性　cf. ハイデッガーの存在史

・宗教学：本質・経験・規範

→　循環構造（宗教は、本質概念、経験概念、規範概念の三重構造を有する）

cf. トレルチのキリスト教概念の分析

1)宗教の原理論（宗教哲学）

2)宗教の思想史（宗教史／宗教類型論）

3)宗教の体系論（神学・組織神学）

「文化の神学に対しては、文化体系的な諸学一般の有する、とりわけ体系的な宗教学の有する三重性に対応して、次の三つの課題が課せられる。すなわち、1.文化の一般的な宗教的分析、2.文化の宗教的類型論と歴史哲学、3.文化の具体的で宗教的な体系化、である。」（ibid., S.76）

８．文化は宗教の表現形式であり、宗教は文化の内実である（ティリッヒ）。

↓

西欧近代の国民文学は、キリスト教との密接な関わりにおいて論じ得る。宗教は文化の母体である。

「あらゆる事物は直接的意味、つまり事物の全体性の連関における意義を有している。しかし、精神は本質的に、事物の直接性に満足せずにそれを超えて進んでゆくのである。個々の意味は他のすべての意味と連関しているのであるから、精神は事物の全体性をも超えてゆくことになる。」（Tillich, 1919/20, .312f.）

「あらゆる事物は、そのうちに、思惟と存在の、＜存在＞と＜本質＞の、存在と価値の二重性を抱えている。」（ibid., 313）

「内実は形式と内容の背後に遡る体験の質である。」（ibid., 316）。

「現実の体系が構築されるところにおいては、形式の内に、単なる形式以上のものが顕わになる。この体系の生きた力が体系の内実であり、体系の創造的な立場、根源的直観なのである。あらゆる体系は、それを根拠づけ構築する原理によって活力が与えられている。しかし、すべての究極原理は究極的な現実直観、根源的な生の態度の表現である。内実が、諸学の形式的体系を通して、あらゆる瞬間に現れ出る。それは形而上学的であり、すなわち個々の形式や諸形式全体を超えている。……形而上学的ものは体系の生きた力、意味、血液なのである。」（Tillich, 1923, 118）

９．近代の基本原理としての自律性・自由。

近代文化（特に、啓蒙主義的近代）は宗教的基盤からの解放を目指した。

↓

西欧近代の国民文学は、宗教的基盤からの分離において、それ自体として論じ得る。

10．思想研究の前提的知としての思想史

思想と思想史（哲学と哲学史、組織神学とキリスト教思想史）とは循環関係にある。

ティリッヒでもバルトでも。キリスト教史の古代～宗教改革は、聖書学とともに、キリスト教研究の前提に属する。

＜参考文献＞

１．ティリッヒ『ティリッヒ著作集』白水社。

文化の神学：第７巻、第９巻

『キリスト教思想史』別巻２、３巻

Tillich（1919）：Über die Idee einer Theologie der Kultur, in: *Paul Tillich. Main Works* vol.2, de Gruyter, 1990, S.69-85.

（1919/20）：*Berliner Vorlesungen I* (1919-1920), in: *Ergänzungs- und Nachlaßlände zu den Gesammelte Werken* XII, de Gruyter, 2001.

（1923）：*Das System der Wissenschaften nach Gegenständen und Methoden*, in: *Paul Tillich. Main Works* vol.1, de Gruyter, 1989, S.113-263.

２．ティリッヒ『諸学の体系』法政大学出版局。

３．芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。

『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。

４．ガダマー『真理と方法　I、II、III』法政大学出版局。
５．波多野精一『時と永遠　他八篇』『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫。
６．マクグラス『キリスト教思想史入門――歴史神学概説』キリスト新聞社。